

(対象事業：

)

事業名：3つの特別展における学習プログラムの
共同開発と実践

事業者名：神戸市立博物館

連携事業館名：神戸市内小中学校及び高等学校

住所：神戸市中央区京町24番地

TEL：(078)391-0035

FAX：(078)392-7054

HPアドレス：

<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/museum/>



① 施設概要

神戸市立博物館は、昭和57(1982)年に、以前からあった市立南蛮美術館と考古館を統合し、神戸の歴史を展示に加えた新しい人文系の博物館として設立。基本テーマは「国際文化交流ー東西文化の接触と変容」。約39,000点の収蔵品があり、国宝・桜ヶ丘銅鐸をはじめとする考古資料、多数の重要文化財を含む南蛮・紅毛美術、全国有数の質・量をほこる古地図類が核となっている。常設展、企画展、特別展も基本テーマに沿って開催している。収集・展示に加えて、様々な事業を展開。特に学校との連携は館活動のひとつの柱として、活動推進を図っている。

② 事業の意図目的

平成14年度の学校で活用できる収蔵資料の教材化、平成15年度のガイドブックの作成と「学社融合」の考えに基づいて積極的に学校との連携活動を進めてきた。平成16年度はさらにそれを進め、当館で開催する3つの特別展に関して学校教員との継続的な研究協議等の中から、児童生徒向けの学習プログラムを開発・実践しようとするものである。事業推進の中で学校と博物館とのネットワークの強化を図る。

③ 事業概要

●学習プログラム開発のための研究協議の場の設置

博物館スタッフと学校教員とが継続的に研究協議できる場（プロジェクトチーム）を設けた。

●学習プログラムとしての「ワークショップ」等の実施と「ワークシート」等の作成

3つの特別展それぞれに関連して学習プログラムとしてのワークショップ等の開発と実践やワークシート・鑑賞ガイド等の編集・発行に取り組んだ。

④ 事業の製作物及び報告書等

栄光のオランダ・フランドル絵画展『こどものための鑑賞ガイド』(B5サイズ16頁)

よみがえる兵庫津展『こどものためのガイドブック』(A4サイズ8頁)

発掘された日本列島2004こどものためのガイドブック

『土の中からのメッセージ入門編』『土の中からのメッセージ上級編』

(各B5サイズ12頁)

⑤ 参加者状況

参加者人数 延べ 14,602人

内 訳 ガイドブック等配布 13,351

ワークショップ等参加 1,251

(1) 事業の実施状況について

はじめに

神戸市立博物館では、平成14年度から「芸術拠点形成事業」に取り組んできたが、16年度に実施した事業は14・15年度の内容を継続・発展させることを目標においた。なかでも学校教員との継続的な研究協議の場の設定には特に重点を置き、日々子どもたちに接する立場から、わかりやすい学習プログラムの開発・実践に力を注いだ。

1. プロジェクトチームの設置

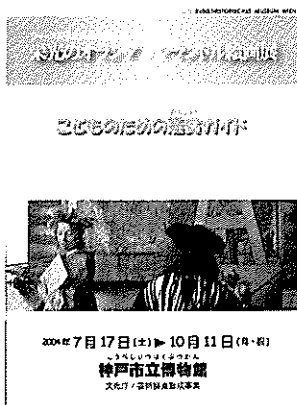
それぞれの特別展に関する学習プログラム開発を目的としてプロジェクトチームを設置した。具体的には、鑑賞ガイドの作成とワークショップの企画立案が主な活動内容となる。メンバーは、学校教員（神戸市小中学校美術・図工・社会科研究部員）と博物館スタッフ。それぞれの特別展のテーマが美術・歴史・考古と異なるため、校種や関連教科を考慮したうえで依頼した。7～8回にわたる研究協議は、学校での勤務が終わってからの開催となり、時には休日の開催や夜遅くまでかかることもあったが、終始積極的に活動した。

2. 鑑賞ガイド

(1) 作成について

鑑賞ガイド作成の研究協議で留意した点は、現場の教員の意見を十分反映させて、子どもたちにわかりやすく、役に立つものをつくることであった。作品の前でじっくり立ち止まり鑑賞する手助けとなることはもちろん、学校での授業の深化、発展をも目指した。また幅広い年齢の子どもたちに受け入れられるよう、ことばの選択やルビ、写真の大きさなど工夫を凝らした。クイズ形式を入れたり、創作のページをつくるなどもしている。

さらに学校の授業でも使えるよう基本的な事項の確認を編集したり、地域性を強調するなどした。特に「よみがえる兵庫津」では自分たちの暮らす地元の歴史に興味を喚起されるよう工夫した。いずれにしても、学校教員（現場の立場）の意見を十分に反映させることで、博物館（専門的立場）からみた見所、解説に偏りがちであった編集内容に、変化が起こったことは確実である。



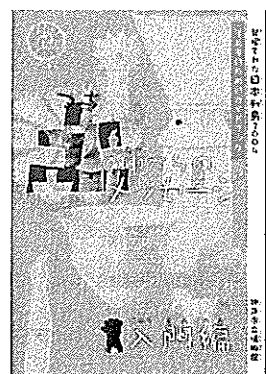
栄光のオランダ・フランドル絵画展

『こどものための鑑賞ガイド』



よみがえる兵庫津

『こどものためのガイドブック』



発掘された日本列島 2004

『こどものためのガイドブック』

(2) 配布、活用について

完成したガイドブックは、特別展開催中に来館した小中学生全員に配布した。それは休日における個人、平日における学校団体を問わない。学校団体での入館は、校外学習や修学旅行など様々であるが、今年度は部活動・クラブ活動での入館が多く見られた。特に夏休み中の「栄光のオランダ・フランドル絵画展」では美術部・クラブ単位での入館が目立った。

ガイドブックの活用については、当館所蔵資料や展示資料の教材化と並行して推進してきた。今年度も収蔵・展示資料をいかした、ガイドブックを活用しての「連携授業」の実践につとめた。「連携授業」とは、学校教員と博物館スタッフが共同で授業プランを練り、基本的にはティームティーチング形式ですすめるものである。作成したガイドブックを活用しながら16年度に実施した授業は以下に示すものである。

ガイドブックを活用しての連携授業

実施日	学 校 名	学年	教科	内 容
H16. 7. 15	神戸市立長田小学校	6 年	図工	フェルメールについて
H16. 9. 21	神戸市立大原中学校	2 年	美術	フェルメールについて
H16. 11. 17	神戸市立須佐野中学校	1 年	総合	地域の歴史を知る
H16. 12. 8	神戸市立須佐野中学校	1 年	総合	兵庫津フィールドワーク

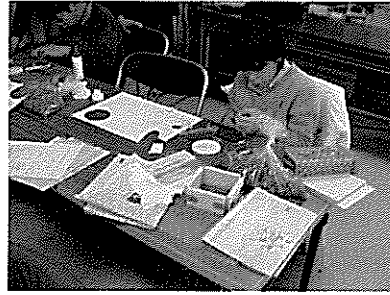
さらには、鑑賞の前にガイドブックを活用してのオリエンテーションも積極的に実施した。単にガイドブックを手にするだけでなく、ポイントをわかりやすく示し、興味を喚起してから展示会場に向かうというスタイルである。小学校7校・501名、中学校5校・200名、高等学校3校・98名を対象に実施した。博物館スタッフが、ガイドブックを手にとって、内容を説明したり、教科書と関連づけたりするなどして、より作品が身近になるよう留意して実施した。

3. ワークショップについて

展示してある作品や地域についてより深くしってもらうことを目的に企画した。「栄光のオランダ・フランドル絵画展」では、「画家のアトリエを推理する」と題し、フェルメール作品の光の使い方について、カメラオブスクーラの制作を通して考える企画を2回、「子どもアートデイ」と称して休館日に子どもたちが自分で選んだ作品を思い思いにスケッチするという日を1回実施。「よみがえる兵庫津展」では、兵庫津界隈をグループごとに課題を持って探検するというフィールドワーク形式を1回実施。「発掘された日本列島 2004 展」では、金属鏡、古代銭、弥生琴を各自で再現してみるという企画を各1回実施した。プログラム開発の段階から、子どもたちの参加体験を中心に据えた企画にするという大前提がつくられたこともあり、いずれも子どもたちの活動を主軸にプログラムが進行するようにしており、主体的な活動が自然と行えるようにした。指導は、プロジェクトチームの学校教員と博物館スタッフが行った。



子どもアートデイの様子



金属鏡を作成している様子



兵庫津でのフィールドワーク

（２）連携等について

学校教員とのプロジェクトチームを展覧会ごとに設置した。神戸市内の小中高等学校の学校教員で、展覧会のテーマなどに関連させて社会科、美術科、図工科の教員に依頼した。６、７名で構成し、会合も６、７回ずつ開催、多くを博物館内で行ったが学校での勤務の合間を縫っての研究協議のため夜遅い時間になることもしばしばであった。同じ展覧会を先行して開催している美術館、博物館への研修なども行い、学習プログラム開発に取り組んだ。校種の違いや経験の違いなど異なる視点からの意見が活発に出され、新しい視点が博物館スタッフにも持ち込まれたことは間違いない。自らが接する児童生徒を念頭に置きながらの具体的な発想と専門的な資料を扱う学芸スタッフの発想が互いに刺激し合いながら、新しいプログラムの構想が生み出されてきた。すべてのプログラムを終えてのプロジェクトチームを構成した学校教員、博物館スタッフ双方の感想は、また機会があればもう一度やってみたい、というものであった。

（３）成果物について （ガイドブックについて）

それぞれの展覧会で作成したガイドブック、ワークシートは、学校教員との研究協議に基づいている。書き込みの部分や地図、クイズ、トレーシングペーパー、さらには展覧会のキャプションとの関係をもたせた解説内容などを盛り込み、多様な内容となるよう工夫を重ねた。「発掘された日本列島 2004 展」では入門編と上級編の２種類のガイドブック編集を行い、幅広い年齢の子どもたちの利用を促すようにした。

それぞれのガイドブックは、展覧会が終わってからでも学校の授業や自由研究の資料としての引き合いがあり、残部はほとんど残っていない状況にある。

（４）参加者の反応

●概要

ガイドブックそのものについては、内容や工夫した面など、児童生徒からは概ね好反応を得ることができたと考えている。展示作品につけられている作品解説は、大人向けでありどうしても児童生徒の興味関心を引く内容とはなっていない。ガイドブックを持ちながらの展観は、作品の理解を促し、さらなる興味を引き起こしている。友人同士がガイドブックをはさんでの会話がはずむ場面もしばしば目にしたり、休日などは親子でガイドブックを手にとり作品の前で熱心に話し合う光景も多く見た。博物館の中だけでなく家に帰ってからも、学校の授業にも活用されている。

ワークショップ参加者からも概ね好評を得ていると考えている。参加体験し、自分でつくった作品を持ち帰ることができることで、満足感が高い時間を過ごすことができているようだ。子ども向けのワークショップに大人の人が何人も参加を希望されることも複数回あり、内容の質の高さを示している。

●参加者の感想（ガイドブックについて）

参加者（児童生徒とその保護者）の感想については、展覧会中に実施したアンケートなどを報告する。

- ・ 子ども用ガイドはとても役立ち、最後まで興味深く見ることができました。これからこのようなガイドをつくってください。
- ・ 見やすかったし、わかりやすかった。
- ・ クイズ形式が楽しかった。
- ・ 展示をただ見るだけでなく、ガイドブックとして家に帰ってからも長く利用できると思います。（保護者）
- ・ ガイドを見ながらわからないところは親に聞きに来たので、かなり興味を持っているみたいです。家に帰ってからも勉強できる内容なので、すごくいいと思いました。（保護者）

さらにこれからの課題を保護者にたずねると、

- ・ マンガも取り入れるとわかりやすくなるのでは・・・。
- ・ もっとたくさん設問形式で答えを記入し、答え合わせをするようにした方が、より真剣に見て回ると思います。
- ・ もっと内容を増やしてもよかったと思います。
- ・ 両手があくように画板をレンタルできるとありがたい。

5. 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

●リピーター児童生徒の出現

芸術拠点形成事業を継続実施していくなかから、何度も博物館の普及事業に参加する子どもたちを目にしはじめた。彼らにたずねてみると以前おもしろかったのでまたやってきたという。何人かとは顔見知りのようになっており、保護者の方とも気さくに話ができる児童もいる。リピーター児童生徒の出現とともに保護者からの期待も強まっており、より質の高い事業の企画が求められるようになった。

●学校教員との連携強まる

プロジェクトチームの結成でお互いの立場や考えが理解し合え、博物館と学校との連携が深まった。それは、チームに参加した教員がいる学校だけではなく、他の学校とも深まっている。使いやすいガイドブック、学校教員のノウハウが生きた普及事業などが目に見えない効果を実感にもたらしたと考える。当然チームに参加した学校教員のいる学校とはより深い連携がはかられるようになった。教材についての相談、連携授業の依頼など顔の見える関係が深まっている。